

I ターン漁師の挑戦

～奄美大島瀬戸内の海に魅せられて～

瀬戸内漁業協同組合青年部 須崎 康 雄

1. 地域の概要

私の住む瀬戸内町は、鹿児島市から南へ約 450 km, 奄美大島の南端部に位置し、南部大島と加計呂麻島、請島、与路島の有人3島、及び無数の無人島からなる人口約1万人の町である。

大島本島と加計呂麻島の間には静穏な大島海峡があり、国際的な避難港として、また、水産業の一大生産基地として重要な役割を果たしている。

また、亜熱帯性・海洋性の温暖な気候に恵まれ、貴重な野生動植物の生息する原生林や美しいサンゴ礁など、多彩で豊かな自然環境を有している。



図1 瀬戸内町位置図

2. 漁業の概要

私が所属する瀬戸内漁協は、正組合員 147 名、准組合員 103 名で構成されている。主な漁業種類は、カツオ一本釣り漁業、瀬物一本釣り、追込網漁業、ほこ突き漁（素潜り漁）で、その他刺網や定置網等多岐にわたる漁業が行われている。

また、静穏な海域を有する大島海峡ではクロマグロ・カンパチを始めとする魚類養殖、及びマベ等の真珠養殖が盛んに行われている。平成21年の水揚実績は974トン、778,742千円である。

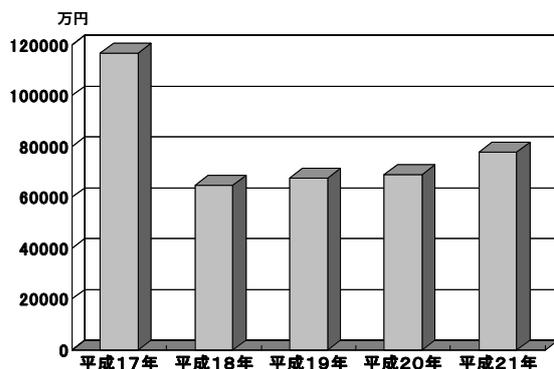


図2 瀬戸内漁協における生産額の推移

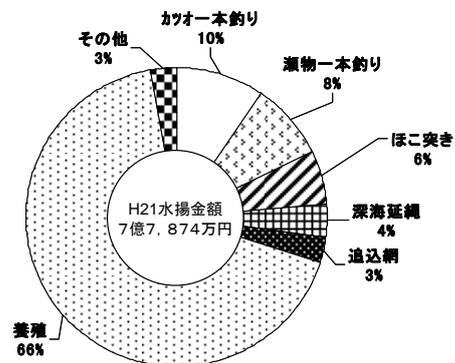


図3 漁業種類別生産額の割合

3. 研究グループの組織と運営

私は現在、追込網とほこ突き漁の2つ漁業を主に営んでおり、漁協青年部、ほこ突き業者会、せとうち漁業集落に所属している。その中で、最もお世話になっている追込網と瀬戸内漁協青年部について述べる。

・追込網

奄美大島における追込網は、明治末期に沖縄から伝わった組織的な漁業として伝統ある漁法であり、私が暮らす瀬戸内町にも大正2年に沖縄糸満方面の漁夫数十名が渡来して始まったとされている。追込網はグループで操業され、このグループは「組」と呼ばれている。多いときは40人ほどの漁夫で組織したようである。現在、瀬戸内町内には2つの組があり、私が働いている組では8名の仲間で、主に赤ウルメ（タカサゴ、クマザサハナムロ）、ヒキ（スズメダイ）といったサンゴ礁で群れる魚を漁獲している。

・瀬戸内漁業協同組合青年部（せとうち漁業集落）

瀬戸内漁協青年部は昭和62年に発足し、今年で創立24年目になる。部員は20名、うち、10名が島外出身、2名がUターン、平均年齢は43才で、一本釣、ほこ突き、魚類養殖、真珠養殖と様々な業種のメンバーが集まり、大漁まつりをはじめ、密漁監視等、様々な取り組みを行っている。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は、東京生まれ東京育ちだが、幼いころから魚を釣ったり生き物を獲ったりするのが大好きな少年だった。行くのはもっぱら川や湖がほとんどで、海へ行くのは海水浴程度。しかしそんな私が大学に入学してから始めたダイビングで海の魅力にすっかりはまってしまった。先輩の薦めで始めた水中写真でさらにそのおもしろさにはまり、いつしかそれを自分の仕事にしたいと考えるようになった。在学中は学業そっちのけで暇さえあれば海に通い、ダイビングサービスの手伝い、プロ水中カメラマンのアシスタントなどを経験して、卒業後にダイビング雑誌の編集者兼カメラマンになることができた。

ダイビング雑誌の仕事は多忙で、世界、日本の各地の海へ撮影取材に行き、帰ってきたら、写真選び、レイアウト、原稿を書いてページを作っていくというこの連続。締め切りがいやでもせまり、締め切りの数日前になると徹夜で原稿書きということも当たり前だった。それでもいろいろな海で潜れ、多くの魅力的な人たちと出会えたことはすばらしい経験だった。

大好きなことを仕事にできたことはとても幸せなことだったが、この仕事を数年続けていくうちに、何か自分の心の中で引っかかるものがあることに気付いた。それは「いろいろな海へ潜りに行ってはいるが、自分は表面的にしか海のことを知らない



写真1 ダイビングスポット
奄美ホールにて

のではないか？」ということだった。

取材中、地元の漁師の船に乗らせてもらうことがたびたびあった。八丈島の突きん棒漁師、鳥取のイカ釣り漁師、伊豆の定置網漁師などなど。海の魚を獲ることを生業にしている彼らは、ダイビングを仕事としている私とは、顔の表情や立ち居振る舞いからして海を見ている視点が全く違うような気がした。自分の心の中のモヤモヤが膨らむのを感じながら、漁師への興味が日増しに大きくなっていった。

その時私が決めた想いは、カメラマンとして「漁師の世界を撮ろう!」。漁師の世界を自分の目で見ることで、何かより深く海のことを知ることができるのではないか?後は行動を起こすのみだった。

そんなことを考えるようになった私が、どのようにして漁師の道を歩むようになったか、そして漁師の世界に飛び込んで何を感じたかを紹介したいと思う。

5. 実践活動の状況

1) 私が漁師になるまで

- ・一本釣りの本場、高知のカツオ一本釣り漁師になる。

漁師になるには?と考えた時に、まず思い出したのが以前知り合った元鰹一本釣り漁師。彼に連絡をとり鰹船に乗せてもらえないか聞いてみた。「バカかおまえは、おまえには無理だ!」という言葉で一喝された。その時の私の年齢 28 歳(独身)。経験のなさや年齢的な問題、そして本当にやる気がなければ勤まらない仕事だということを聞かされ「一週間考えてもう一度連絡してくれ!」ということになった。



写真2 第38K丸

予想以上に厳しい世界だということを思い知らされ、考えに考えて、「写真は後でも撮れる、まずは鰹船の世界に飛び込んで漁師になってやる!」と決めた。一週間後に自分の決意を伝えると、「そこまで本気なら紹介してやる。」ということになった。

6年間勤めていた雑誌社を退職して、高知県土佐清水の鰹船・第38K丸の乗組員に私はなった。船頭(漁労長)の名前が偶然にも私と同じ「康雄」だった。何か見えないつながりがあるのかも?と感じてしまった。第38K丸は115tで乗組員は18名。各個人の「ハウス」と呼ばれる部屋もあり、そこは仕事場であり家でもあった。3月に土佐清水を出港すると8月のお盆休みはあるものの11月まで土佐清水には戻らない9ヶ月間にわたる漁期。その間鰹を追って日本列島に沿って漁をし、各港に水揚げしながら三陸沖までのぼっていく。

漁師の仕事初体験の私にとって当初鰹一本釣りの仕事は、



写真3 操業風景

ほとんど 24 時間拘束されていることもあって肉体的にも精神的にも相当きついものだった。一つの群れで一気に 10 t 以上釣れる時もしばしばで、そんな時は船の上はまさに魚との格闘という感じであったし、水揚げにしても機械など使わず 30 t からの魚を手で揚げていくということも驚きだった。これほど自分の体を酷使したのも初めてだったが、それを繰り返すうちにきつい仕事を乗り越えた先の「心と身体の充実」を感じるのも初めてのことだった。

真剣勝負の鰹一本釣り漁師の一員とし日々を過ごすことで、なぜか「漁師の世界を撮ろう！」という最初の気持ちは薄くなり、もっと漁師として働きたいという気持ちが大きくなってきた。当初 9 カ月間の漁期が終わったら漁師の写真を撮ることを考えようと思っていたが、結局 3 年間にわたって第 38K 丸で鰹一本釣り漁師としての時間を過ごした。厳しい世界だったがこの 3 年間で、漁師としての喜び、つらさ、悲しみを味わい、その心意気を身に付けたと思う。いつしか自分がカメラマンだということを忘れ、これからも漁師で生きていこうと思うようになった。

・思い描いた漁師像へ。奄美大島・瀬戸内の海で追込漁師となる。

ダイビング雑誌社で仕事をしている時取材で訪れた奄美大島南部・加計呂麻島周辺の海がずっと気になっていた。漁師になるなら高知の鰹船のように出漁したら家になかなか帰らないような仕事ではなく、自分の家があり 1 日の漁が終わったらそこに帰るような暮らしがしたかった。ちょうどそのころ結婚することも決まり、漁師の仕事があるのか、住む家はあるのか調べるために、奄美大島南部瀬戸内町に仕事探しの旅に出かけた。いまから 7 年前 2003 年の冬だった。

仕事を探す際にまず、瀬戸内漁協に話を聞きに行った。しかしそこでは「漁協として仕事を紹介することはしていない。もしここで漁師の仕事がしたいのなら自分で探すしかない。」とのことだった。何か突き放された感じを受けはしたが、でも逆にここ瀬戸内は漁師がしっかり漁業で食っていけている海なのではないかという印象を持った。組合員になれば船や住宅を提供してくれる所もあるというが、そういった場所より自分の力で切り拓かなければいけない瀬戸内で漁師になりたいとその時強く思った。

瀬戸内では養殖漁業、旗流し漁業、瀬物一本釣り・鰹一本釣り漁業などがあり、中でも海に潜って漁をする、タンクを使った追込網、素潜りのほこ突き漁があることに心を動かされた。海に潜る仕事だったらいままでのダイビングの経験を活かすことができる。その時知ったのが今お世話になっている追込網の組だった

しかしその当時、親方が重い潜水病にかかり、その治療のため追込網から離れており組としては複雑な時期であった。それでも仕事をやらせてもらえないかあたってところ、手伝いをさせてもらえることになった。それから数回東京から奄美大島を訪れ、そのつど追



写真 4 瀬戸内町嘉鉄より加計呂麻島を望む

込網の手伝いをさせてもらった。親方の身体の具合が徐々にではあるがよくなってきており、2004年春、4度目に瀬戸内を訪れた際に親方に認めていただき正式に今の組の一員になることが決まった。

その年の初夏・6月、結婚したばかりの私は妻とともに東京から瀬戸内町加計呂麻島に移り住み、追込網で生計をたてる生活が始まった。

2) 追込網漁師の日々

「さあ行くぞ！気をつけろよ！」という掛け声とともにタンクをかつぎ、手には魚を追うための棒・ツルシカを持ってメンバーがいっせいに海へ飛び込む。隊列を作り魚のいるであろう方向へどんどん進んでいく。海中のため言葉が通じるわけもなく、意思の疎通はお互いの手による合図と動きだけだ。ねらいのアカウルメの群れを見つけ、それを取り囲むようにしたらツルシカを振って網の方向へ追い込む。最後に丸く袋状になった袋網に魚を追い込んだらその口をみんなでとじる。追い込み漁はメンバー全員の力を合わせなければできない、まさにチームワークがものをいう仕事だ。

そんな追込網に今自分はその一員として参加している。その喜びはとても大きい。今まで自分が経験し、身につけてきたこと全てを出し切ることができるし、また新たな経験をつむことのできる仕事だからだ。漁をするポイントごとの潮の流れや魚の動き、網の張り方から、細かい地形などなど……、追い込みでは頭に叩き込み、体で覚えなければならぬことが山ほどある。しかしその1つ1つを手とり足とり先輩たちが教えてくれるわけではない。「見て、聞いて、やって、仕事は覚えるもの」とまず教えられた。それは人の仕事ぶりをよくみて、分からないことがあったら質問し、そして実際に動いてみるのが大切だということだ。先輩たちは疑問や質問に経験をふまえて応えてくれる。それ繰り返して仕事をするうちに、徐々に私は追込網を頭と体で覚えていくことができた。

3) 島に住む若い力。島の地域社会に暮らす。

「さあ、いらっしやい！！おいしいエビ汁はいかが？」イベントの盛り上げ役は漁協青年部員の重要な役目だ。

私の所属する、瀬戸内漁協青年部ではイカシバ設置・調査などの漁業振興活動ほか地域イベントへの出店やお魚祭りの開催などを通じて地域の重要な盛り上げ役となっている。

昨今、全国的に少子高齢社会の問題が取り上げられているが、ここ瀬戸内町も例外ではない。集落によっては若者がいなくなり豊年祭などの島の伝統的な行事が消えてしまった

ところもある。そのような状況の中、漁協青年部員としてはもちろん、地域社会の若い力、盛り上げ役としての期待を受けているように感じる。

表1 平成21年 漁協青年部の主な活動

月 日	活 動 名
3月 7日	第23回瀬戸内漁協青年部通常総会
3月15日	イカ柴設置活動(離島漁業再生支援事業)
3月17日	養鰯造成試験(奄美郡島水産青年協議会)
4月19日	イカ柴、人工イカ柴追跡調査(離島漁業再生支援事業)
4月19日	加計呂麻バザー参加
4月26日	第15回新鮮なお魚祭り(奄水青協)
5月15日	シーカヤックマラソンイン加計呂麻大会実行
5月24日	イカ柴、人工イカ柴追跡調査(離島漁業再生支援事業)
6月 7日	奄美群島水産青年協議会通常総会
7月 5日	奄美シーカヤックマラソンIN加計呂麻大会
7月19日	マリンフェスタIN加計呂麻(協力)
8月8,9日	瀬戸内町みなと祭り
9月20日	第4回せとうち大漁まつり(離島漁業再生支援事業)
9月26日	県漁青連ソフトボール大会(奄水青協)
11月 7日	「白百合の家」ボランティア活動(奄水青協)
11月14日	県漁青連リーダー研修会(奄水青協)
11月22日	町民と観光大使とのふれあいフェスタ

また、青年部活動では様々な知り合いができ、加計呂麻の一島民として地域社会に溶け込むよい機会を与えてくれたと思う。

4) 見えてきた厳しい現実

瀬戸内に来て追込網漁師となって早7年近くの時間が過ぎようとしている。正直な話、この7年で追込網を取り巻く状況は大きく変わってきた。まず獲れる魚の量が激減し、魚の値段が以前よりかなり低くなり、それに追い打ちをかけて燃料の値段が高騰した。当然収入は年々減ってきている。「自然環境の悪化」「景気の低迷」などなど。県の統計資料を見ると、平成20年の瀬戸内町における漁業経営体数は、私が来た年の95経営体から79経営体に減少した。もちろん瀬戸内だけの問題ではなく日本全国の漁師がかなり深刻な状況だろう。自分自身に関しても、これからどうやってこの厳しい状況を乗り越えていくのかが大きな問題だ。これまで海に関わるいろいろな仕事に携わってきたが、今また新たに何かを始めなければいけない時期が来たと実感している。

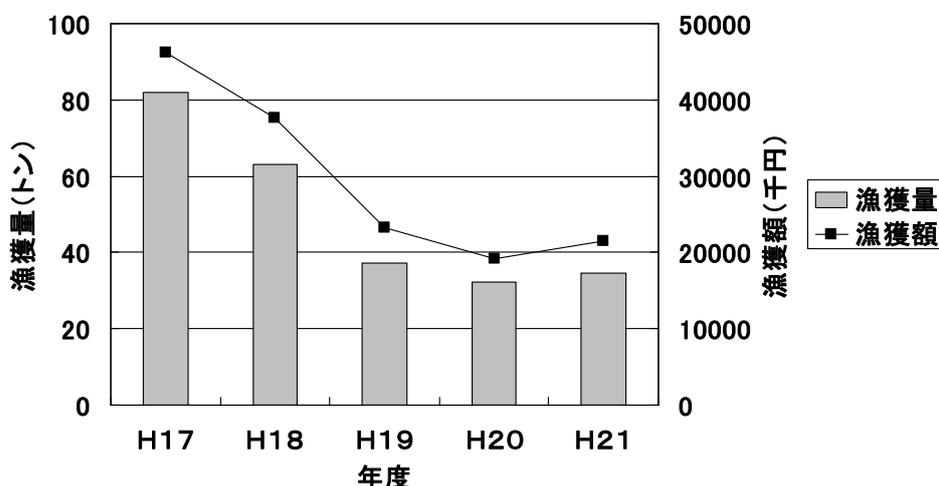


図4 瀬戸内漁協における追込網漁業の漁獲の推移

4) 困難を切り抜けるために

このような、困難を切り抜けるために私が働いている組では、直販、追込網体験等を実施している。また、メンバーも個人で追込網で得た漁のスキルと海の知識をベースにしたほこ突きやダイビングサービスなどを実施し、6次産業化の取り組みを試みている。「イノベーション」である。これらは、漁獲が減り、魚価が低迷している現在、現実的な選択だと考えている。

直販は、主に平成19年5月に開店した漁協直販店「海力」での販売を行っている。「海力」は、我々地元の漁業者からの魚を漁協が買い上げ、生産者価格で地元で販売することにより、漁業者にとっては魚価の向上、消費者にとっては鮮度と低価格を提供している。まさに「Win-Win」の関係であり、奄美大島における地産地消推進の一大拠点となっている。(写真5, 表1)



写真5 漁協直販店「海力」

表2 漁協直販店「海力」の販売実績

年度	売り上げ数量	売り上げ額
H19	14,200 kg	26,236千円
H20	18,039 kg	25,192千円
H21	16,936 kg	26,295千円

追込網体験は観光客等を漁場に連れて行って、我々の追込網の操業を見学してもらうというものである。特に宣伝はしていないので、実施回数は少ないが、すばらしい奄美大島の海で繰り広げられる光景は、奄美大島オンリーワンの観光資源として自負できるものと思っている。

私自身も追込網に加え、追込網漁から得た知識と技術を応用し素潜りのほこ突き漁を併せて営んでいる。また更に今後の展開として、夫婦2人でダイビングサービスを経営し生活を立てていくことを決めている。私の妻はもともとダイビングインストラクターで、奄美に来たからには「いつかはダイビングサービスを始めよう！」というのが目標だったこともある。

6. 波及効果

東京生まれの東京育ちの自分であるが、自分のように島外出身で瀬戸内町の漁師になった者は、現在、10名であり漁協青年部の半数を占めている。

皆、地元の追込網や養殖業に入り、スキルを磨き、独立し、また新たな人たちが地元の追込網や養殖漁業に入ってくるというパターンで漁師になった。

これらは、私がお世話になっている組のように我々島外出身者を暖かく迎え、一人前の漁師に育ててくれたすばらしい瀬戸内の漁業者の方々のお陰である。我々にとってのいわば「水産学校」である。

これら我々を受け入れてくれたところには、いつでも入れるという訳ではないので、このような巡り合わせに我々が出会えたのは非常に幸運だったと思う。しかしながら、我々、若い力は、多少なりとも地元の水産業の活性化に少しでも役に立っていると思うし、漁師を志す人たちの道しるべになっていると思う。

実は、私も追込網の仕事が1人前になったとは思っていないが、親方と相談して今年いっぱい独立することになっている。もちろん、これで追込網との関わりが無くなるというわけではない。私がそうだったように、私が抜けることで志ある若い人が我々の仲間に加わるチャンスになればと思う。

7. 今後の課題や計画と問題点

奄美大島の海は美しい。その奄美大島の海から得られる資源は、なにも魚だけではない。そこにあるサンゴや自然、風土、人、暮らし全てが資源である。これらの資源は至るところに隠れている。この資源探しは島外からやってきたIターンの者が最も得意とするところ

るのではないかと考える。なぜなら「違いが分かる」からである。

また、暮らしていくためには資源を金に変えていかなければならない。魚価安の昨今、水産物の付加価値向上は当然のことであるが、瀬戸内の海、瀬戸内の自然、瀬戸内の風土の付加価値向上を図り、我々、瀬戸内の海に生きる者の生活の安定に繋げていく必要がある。これらは、私たち水産業に関わる者だけではなく、地域、異なる産業、行政が一体となって多角的な視点で磨き上げて行く必要があるのではないかと思う。

さらに、これらの資源は全て無限ではないということも、私自身、強く感じる。それは、私が都会育ちで、瀬戸内の海にあこがれてやってきたということだからかもしれない。私たちを取り巻く環境は様々なバランスの上に成り立っている。極端な作用はバランスを崩す。私たちの QOL (Quality Of Life) とは何か見極めた資源管理が必要であるのではないかと思う。

今回、私が漁師になったこと、そして感じた事を述べてきた。これは、目の前に広がる瀬戸内の海、この自分たちの大切な海を、漁師としてダイバーとしてこれからも潜り続けていこうと思う気持ちからである。それが私のずっと考えていた「海を深く知る事」につながると思うから。